

ことの本末をかつた大根因は、労働階級の国際的團結の缺乏であつた。

吾々は国際労働會議の否認・棄権に止まるべきではない。

労働會議の正付の障礙と共に、アメリカリアリズムの勝利を得るための絶対的條件たる、国際的團結のための運動に積極的に進ませなければならぬ。

我々は今やこの進歩を現実の開始しうべき段階に達したのである。

そして斯くの如き国際労働會議に対する我々の態度が如何に正しく、それ故に、今日に於ける我々が無産階級運動の発展段階に於ける必然性を有するかも見やう。

国際労働會議に対する我々の発展過程を追跡すべし。

第一期 労働會の樹才代表の対運動

労働組合運動の時代——この時期に於ては、労働會議の承認率は問題ではない。

又労働組合を重視したことに對する抗議の運動であつた。

第二期 国際労働會議の簡單なる否認

労働運動の經濟的平等の時代

第三期 国際労働會議の活用

所謂第一期の轉換期、英同盟の十三年度宣言、組合主義的平等運動への進出

第四期 国際労働會議に對する右翼の積極的利用と左翼内の利用と

否決の二つの意見の対立——結核利用

全国組合協議会の宣言

英同盟の分裂——組合主義と切取主義の對立闘争時代

第五期 国際労働會議の否認

国際的運動への積極的進出

現実の方向轉換過程

全無産階級の政治闘争主義への発展轉化時代

斯くは、今や始めて無産階級の国際的運動、従つて又国際労働會議に對する対策を、とて、既に全無産階級の政治闘争主義の立場から解決すること亦出来るのであり、又しなげればならぬ。

然し、我々無産階級の所謂全線的展開は、尙未だ充分に行われて居らぬ。そこにはまだ一定の程度もある。我々の国際運動も亦、直ちに具體的組織的運動へまで進出し得ぬ。

国際的團結、組織的運動への宣傳と、アンチ・シオン主義が今日に於ける吾々のなすべきこと